

## 1-2. 奄美分室の活動

高宮広土・宋 多情・櫛田優花

### Amami Station Activities

TAKAMIYA Hiroto, SONG Dajeong, KUSHIDA Yuka

鹿児島大学国際島嶼教育研究センター奄美分室

*Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, Amami Station*

国際島嶼教育研究センター奄美分室は平成 27 年（2015 年 4 月）に奄美市名瀬に開設された。その主な目的は奄美群島における研究の促進および研究成果を地元へ還元することである。以下に研究の促進および地元への還元について報告する。

Kagoshima University Research Center for the Pacific Islands, Amami Station, was established in April 2015. The main purposes of the Amami Station are 1) to facilitate research among the researchers at Kagoshima University and their related scholars, and 2) to acknowledge our research to the Amami people. Below, we will summarize our activities during the fiscal year 2020-2021.

#### 1) 研究の促進

分室では研究者が限られた時間で効率的・効果的に研究が実施できるように宿舎（2 部屋）、実験室および公用車を提供している。令和 2（2020）年度および令和 3 年（2021）年度における宿舎利用は 52 件で、公用車利用は 43 件であった。この間、実験室は主に分室のメンバーにより利用された。新型コロナウイルス感染症の流行前、例えば平成 30（2018）年度から平成 31・令和元年（2019）年度の 2 年間における利用件数は宿舎 55 件および公用車 72 件であったので、新型コロナウイルス感染症の国内拡散以降の利用者は減少している。実験室に関しては利用者数の記録は残していないが、実験室も新型コロナウイルス感染症流行以前には本学の研究者やその学生がしばしば利用されていた。新型コロナウイルス感染症が若干収束しつつある令和 3（2021）年秋以降は宿舎利用および公用車利用は微増傾向にある。来年度以降の宿舎、公用車および実験室の利用は新型コロナウイルス感染症の状況によると推測される。

#### 2) 研究成果の地元への還元

研究成果の地元への還元として、奄美分室では「奄美分室で語りましょう」をその開設時から実施している。平均で年 6 度ほど開催していたが、新型コロナウイルス感染症のため、令和 2 年度は 2 回のみで、今年度は 4 回（予定を含む）開催した（詳細は「奄美分室で語りましょう」のセクション参照）。新型コロナウイルス感染症に加えて、「島めぐり講演会」を分室メンバーが主体となって運営しており、この理由もあり、「奄美分室で語りましょう」の年間開催数は開設当時と比較して少なくなっている。また、島嶼研研究会のオンライン中継

会場としても地域の方に利用され、教育普及の場として機能した。地元の方が論文などに関して相談のため来訪することもしばしばあった。加えて、「分室だより」の編集・執筆も行い、令和2年度から3年度にかけて、No.11, 12, 13 が刊行済み、No.14 が2022年3月に刊行予定である。また、奄美FMには奄美分室奄美開設当初から出演させていただき、研究成果をオンエアしているが、新型コロナウイルス感染症により、昨年度はなく今年度は「海」と「先史」に関して出演した。「島めぐり講演会」としばしばセットで「植物観察会」が行われるが、奄美大島、喜界島、沖永良部島において「植物観察会」を運営した。海の生き物を学習する目的として「磯の観察会」を実施した。

今年度初の試みとして、奄美テレビにおいて「①先史時代」「②植物」「③陸上動物」「④モニタリング」「⑤川・海の生き物」および「⑥エコツーリズム」にかんして収録が行われ、放映されている。出演は鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの専任教員および兼務教員で、総勢9名およびテーマは13本であった（詳細は「奄美テレビ」のセクション参照）。収録された番組はYouTubeに掲載中・掲載予定である。奄美市市民交流センター・名瀬公民館主催の生涯学習教室における講話も今年度初の試みであった。「蚊」と「狩猟採集」について一般市民にわかりやすく紹介された。

数多くの記事が新聞掲載された。その最も大きなものは2020年1月より2021年3月まで南海日日新聞に連載された『魅惑の島々、奄美群島』であろう。大別して「①島嶼文明」「②歴史・伝統文化」「③社会・産業経済」「④自然（陸）」「④自然（海・川）」「⑥自然（利用）」「⑦自然（外来種・諸問題）」および「⑧教育の場としての島」というテーマより構成され、鹿児島大学国際島嶼教育研究センターの専任教員、兼務教員および客員研究員によって執筆された（総勢49名、66本掲載）。この連載コラムの主な目的は研究者による奄美の方々へ「知らざる奄美（各自の研究成果）」を紹介することであり、容易な言葉で上記のテーマが解説されている。これらのコラムは後に島嶼研ブックレット（No.15、No.16、No.17、No.18）として刊行されているほか一部は英訳され、島嶼研のOccasional Papers No.62として発行された。島嶼研客員研究員も研究成果を地元に戻元している。例えば、『ボーダーから奄美を考える』を南海日日に『魅惑の島々』とほぼ同期間に連載コラムとして計11回掲載している。また、大島紬に関しての展示会も開催された。これら以外に研究紹介、書評、文献紹介などの記事を掲載した。掲載新聞は地元の南海日日新聞と奄美新聞に加え、南日本新聞、朝日新聞、毎日新聞、琉球新報および沖縄タイムスである。

以上のような活動を実施してきたが、奄美群島の一般の方々には「奄美分室」の存在は十分に知られていないようである。上記以外の新たな手段の模索も必要かもしれない。